

草子地を再考する

—〈注釈〉という機能を中心に—

福沢 将樹

1. はじめに

かつて平安物語文学を中心に「草子地」が盛んに議論されたことがあった^{注1)}。よく引用される定義は次の中野(1971b)のものである。

- (1) 物語の地の文において、感想・注記・批評・説明など、作者と思われるものが物語の表面に出て、直接発言している部分、あるいは読者を意識した作者の姿勢が認められる部分を草子地という。

(中野1971b^{注2)}: 111)

しかし(1)には、文言上いくつかの問題がある。第一に、ここでいう「作者」とは、今日「語り手」と呼ばれるものである。実際小西(1998)[初出1967]は(2)のように「草子地」を定義している。

- (2) 全知視点の語り手が、作中場面から離脱し、語り場面に移動して、自身の考えを一人称的に表明する部分。(小西1998: 40)

第二に、「語り手」((1)の「作者」)が述べる内容は、「(普通の)地の文」とは異なるものであることが前提としてある。しかし「説明」も「草子地」であるとする、普通の地の文も「説明の草子地」として認定されなければならないことになりそうである(この点は後述する)。実際高橋(1982)などによって次のような指摘が

なされている。

- (3) 近代の論者たちにおいて「草子地」がどうしても「地の文」全体にまでおし拡げられる傾向にあるのも、そうした注釈史[引用者注——中近世の源氏の注釈]の必然というるのである。[...]「草子地」概念はまさしく地の文一般に解消するほかなくなってくる。

(高橋1982: 229-230)

本稿では、「草子地」が「普通の地の文」に対する〈注釈〉である、という側面をもう一度確認しつつ、主に近代文学の例を基に、〈注釈〉としての「草子地」の広がりを見たいと思う。

2. 近代文学における草子地

近代文学においては「草子地」という用語はあまり用いられないだろう。しかし今どき「作者の介入」と呼ぶわけにもいくまい。当面「草子地」という用語を近代文学においても使用することとする。

「草子地」が「普通の地の文」と区別されるべき理由として挙げられることは、先述したように、第一に出来事や情景の描写とは異なるものだからである。第二に、「語り手」が他の「登場人物」とち異なる〈人格〉を持っているからである^{注3)}。そこで「語り手」が特有の人物像を纏って「顔出し」^{注4)}した場合、いかにも「草子

地」らしいものとなる。まず2.1に草子地らしい草子地の類型を挙げる。

2.1 〈メタ言語〉

- (4) 作者はさっき、「下人が雨やみを待ってゐた」と書いた。「…」前にも書いたやうに、「…」だから「下人が雨やみを待ってゐた」と云ふよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれてゐた」と云ふ方が、適當である。「…」

(羅生門：146。傍線部引用者。以下同)

「羅生門」のこの箇所は、「草子地」が〈メタ言語〉として用いられたもののうちよく知られたものの一つである。既出のテキストを再び引用してみせ、その文言自体に対するコメントを付している。

これに対して2.2に挙げるような、単なる〈注釈〉の中には、あまり草子地らしくないものも多数含まれる。

2.2 〈叙事〉・〈叙景〉と〈注釈〉

物語には最低1回以上の出来事、或いは前状態から後状態への変化が必要である^{注5)}。本稿では出来事や変化を述べる叙述を〈叙事〉とし、状態を述べる叙述を〈叙景〉とする。〈叙事〉の前後には、明示的にしろ暗示的にしろ、〈叙景〉がついて回るのが普通である。〈叙景〉は必ずしも風景とは限らず「金持ちだった」のようなものも含まれる。

- (5) ¹⁾ 下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘を払つて、白い鋼^{はがね}の色をその眼の前へつきつけた。

²⁾ けれども、老婆は黙つてゐる。

³⁾ 両手をわなわなふるはせて、肩で息を切りながら、眼を、眼球が^{まぶた}暈の外へ出さうになる程、見開いて、啞^{しやう}のやうに執拗く黙つてゐる。

⁴⁾ これを見ると、下人は^{ママ}始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されてゐると云ふ事を意識した。⁵⁾ さうしてこの意識は、今までにはしく燃えてゐた憎惡の心を、何時の間に^{ママ}か冷ましてしまった。⁶⁾ 後に残つたのは、唯、或仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。⁷⁾ そこで、下人は、老婆を、見下しながら、少し声を柔げてかう云つた。
(羅生門：151。傍線・文番号は引用者)

このテキストではおおむね次のように叙述が進行している。物語中現在の¹⁾〈叙事〉—— 物語中現在の^{2) 3)}〈叙景〉兼登場人物視点の自由間接話法—— ^{4) 5)}〈叙事〉兼〈注釈〉—— ⁶⁾〈注釈〉—— ⁷⁾〈叙事〉。1)から3)までは〈叙事〉や〈叙景〉を用いて物語中現在に進行している場面を描いている。その出来事や状態は、「語り手」が自ら知覚したもののものであるが、特に2) 3)は登場人物「下人」が知覚したものでもある。

ところが4) 5) に至ると、単に〈叙事〉〈叙景〉とのみ言うわけにはいなくなってくる。「意識した」「冷ましてしまった」という表現は、確かに「下人の心の中に起こった出来事」の叙述ではある^{注6)}。しかしそれは、心の中の動きにすぎず、目に見える出来事ではない。目に見えない変化について、「語り手」が説明を加えて

いるのである。つまり出来事の〈叙事〉であると同時に、1)～3)で展開された場面についての、多分に〈注釈〉としての側面をも持っている。そして6)に至ると「唯～ばかりである」という〈注釈〉の叙述となるのである。

〈注釈〉の表現は、「勿論」「～のである」のように明示的に示されることもあるが、もっと微妙にしか示されないこともある。

ところで(5)の4)5)6)のようなものは、使用頻度も非常に多く、「草子地」とは認定しがたいかもしれない。もしこれらも含めるなら、「草子地」概念は、(3)のように、当初思われていたよりも拡張を余儀なくされる。しかし本稿は(3)に言われるほど極端な拡大を取らない。(3)は〈叙事〉〈叙景〉も含めて全て「草子地」という考え方だが、本稿は、〈叙事〉〈叙景〉はあくまでも中核の本筋と位置づけ、「草子地」は中核に対する〈注釈〉や〈メタ言語〉の類に留める。

〈注釈〉が〈叙事〉〈叙景〉と異なることは、例えばテンスの対立において現れる。「その昔、○○が起こった」〈叙事〉、「昔は○○だった」〈叙景〉のように、〈叙事〉〈叙景〉は過去の事柄を表すことができる。しかし〈注釈〉は、たとえ「唯満足があるばかりであった」のようにタ形を用いても^{注7)}、「昔～だった」という意味ではない。この「た」は過去を表さない過去形^{注8)}である。

以上のように、物語にはまず第一に、中核として〈叙事〉〈叙景〉(Ⅰa)がある。また登場人物の内面を表す〈叙情〉(Ⅰb)もたいてい必要となる。これらは「物語内容」^{注9)}の中核的な構成要素である。

これに対して「草子地」は周縁的存在である。周縁的ではあるが、〈叙事〉〈叙景〉だけを並べたのでは、あまりに淡々として面白みに欠け、また読者の理解に不親切となる憾みがある。そこでたいていの場合、〈注釈〉(Ⅱa)による説明を必要とする。なお「草子地」には、本稿では触れてこなかったが、「推量の草子地」(中野1971b)のように「語り手」の内面を表す〈判断〉(Ⅱb)もある。また以上とはレベルの違う「草子地」として〈メタ言語〉(Ⅲ)もある。以上を以下のように整理しておく。

(6) Ⅰa〈叙事〉〈叙景〉：出来事・状態。「物語内容」の中核。

Ⅰb〈叙情〉：登場人物の内面。「物語内容」の一部。

Ⅱa〈注釈〉：「物語内容」に対して加える草子地。

Ⅱb〈判断〉：「語り手」の内面。

Ⅲ〈メタ言語〉：「物語言説」に対し加える草子地^{注10)}。

2.3 草子地らしくない草子地

以下、若干の草子地らしくない類型について述べる。第一に、注記のみで地の文になっていないものがある。

(7) 検非違使に問はれたる媼の物語

はい、あの死骸は手前の娘が、^{ママ}片附いた男でございます。が、都のものではございません。若狭の国府の侍でございます。名は金沢の武弘、年は二十六歳でございました。[...]中略[...]しかし娘はどうなりましたやら、婿の事はあきらめましても、これだけは心配でな

りません。どうかこの姥^{うば}が一生の
お願ひでございますから、たとひ
草木を分けましても、娘の行方
をお尋ね下さいまし。何に致せ憎い
のは、その多襄丸とか何とか申す、
盗人のやつでございます。婿ばかり
か、娘までも……（跡は泣き入
りて言葉なし。）

* * * * *

多襄丸の白状

あの男を殺したのはわたしで
す。しかし女は殺しません。では何
処へ行つたのか？ それはわたし
にもわからないのです。[...]
（藪の中：116-117。傍線引用者、
ゴシック・節分け記号原文）

傍線部のように、見出し、節分けの「*
***」、その他の注記が付されてい
る。これらも〈注釈〉の一種である。

第二に、こうした注記すらないもの
がある。会話文だけでできている物語や、
以下のように文章の抜粋を配列しただけ
できている物語がある。平仮名交じり
文が妻の日記、片仮名交じり文が夫の日
記と思われる。つまり地の文が全くなく、
注記すらない。当然草子地もない。しか
しこの無言のあり方から、逆に、読者は
自分で草子地を補って解釈する必要を余
儀なくされる。

(8) 四月二日。午後より外出。夕刻
帰宅。

四月三日。朝十時外出。河原町
T・H靴店で靴を買ふ。夕刻帰宅。

四月四日。午後より外出。夕刻
帰宅。

四月五日。午後より外出。夕刻
帰宅。

四月五日。………妻ノ様子ガ
日々変ツテ来テキル。此ノトコロ
殆ド毎日午後ニナルト（朝カラノ
トモアル）一人デ出カケテ行キ、
四五時間ヲ費シテタ飯前ニ戻ルノ
デアル。[...]

四月六日。………午後より外出。
夕刻帰宅。………此のところ私は
連日外出してゐる。私が出かける
時、夫は大概在宅してゐる。[...]
多分夫の頭の中は、私が出かけて
から帰つて来る迄の数時間の間、
私の行動を知ろうと思ふ好奇心で
一杯で、他事を考える余裕なんか
ないであらうと想像される。[...]
私はわざとこゝ数日間の行動を曖
昧にし、「午後より外出、夕刻帰宅」
とのみ記してゐる。[...]

（鍵：151-152）

2.4 「語り手」の草子地と「作家」の草子 地

反対に、テキストの外にいる「作家」の
内面を、事細かに記すという実験も行わ
れている。「道化の華」^{注11)}は、作中に別
の作品（本稿では「作中作」と呼ぶ）の一
部が引用され、その作品を今読み返して
いる作家の内面が描かれる。これを作中
作の側から見れば、一種の「草子地」が夥

しく書き込まれていると見るができる。

- (9) 飛騨は恐縮して、おほきいからだを懸命に小さくした。小菅は不思議さうなおももちで真野の顔を覗いていた。

「おふたりとも、あの、おひるの御飯は？」

「まだです。」ふたり一緒に答へた。

真野は顔を赤くして噴きだした。

三人がそろつて食堂へ出掛けてから、葉蔵は起きあがつた。雨にけむる沖を眺めたわけである。「ここを過ぎて空濛の淵。」

それから最初の書きだしへ返るのだ。さて、われながら不手際である。だいいち僕は、このやうな時間のからくりを好かない。好かないけれど試みた。ここを過ぎて悲しみの^{まち}市。僕は、このふだん口馴れた地獄の門の詠歌を、栄ある書きだしの一行にまつりあげたかつたからである。ほかに理由はない。もしこの一行のために、僕の小説が失敗してしまつたとて、僕は心弱くそれを抹殺する気はない。見得の切りついでにもう一言。あの一行を消すことは、僕のけふまでの生活を消すことだ。
(道化の華：116。字体は通行のものに直す。傍線引用者。以下同)

- (10) 葉蔵は寝ぐるしい思ひをしてゐた。
「寒いな。」ベッドのうへで輾転した。
「うん。」小菅も口をとがらせて合

槌うつた。「酔がさめちやつた。」

真野は軽くせきをした。「なにかお掛けいたませうか。」

葉蔵は眼をつむつて答へた。

「僕か？ いいよ。寝ぐるしいんだ。波の音が耳について。」

小菅は葉蔵をふびんだと思つた。それは全く、おとなの感情である。言ふまでもないことだらうけれど、ふびんなのはここにゐる。この葉蔵ではなしに、葉蔵とおなじ身のうへにあつたときの自分、もしくはその身のうへの一般的な抽象である。[...] おとなはそんな訓練を、まづ好意的に言つて、おのれの生活との妥協から得たものとすれば、青年たちは、いつたいどこから覚えこんだものか。このやうくならない小説から？

「真野さん、なにか話を聞かせてよ。面白い話がない？」

葉蔵の気持ちを転換させてやらうといふおせつかいから、小菅は真野へ甘つたれた。(同：133)

作中作の文章と、作外の作家のコメントとが並列されており、境界ははっきりしない。(10)で、実線部は明らかに作中作の外の作家のコメントであるが、点線部は作中作の中の「草子地」のようでもある。作中作にも作中作内の「語り手」がいるはずであつて、「草子地」があつても不思議はない。そこで「作中作内の語り手の草子地」と「作中作外の作家のコメント」との区別が難しくなってくる。太宰はこの曖昧さをおそらく意図的に行っている^{注12)}。

2.5 草子地と心内文

前項のような作家のコメントと作中語り手の草子地との区別認定問題は、かなり特殊なものであった。一方、登場人物の心内と語り手の草子地との区別認定問題は、もっと頻繁に現れる。現代小説には(11)のように、特定の登場人物が視点人物として機能し、その「地の文」がほとんど全て自由間接話法として現れているものが多い。

- (11) 転籍ではなく分籍してしまっているのだから附票の方にも、
[中略]

これしか記載されていない。

戸籍の附票とは、その戸籍に載せられている人物の現住所を確認するためにつけられているものなので、分籍前の宇都宮の戸籍——現在では除籍になっている「関根庄司」を筆頭者とする戸籍を調べてみれば、その附票には、彰子がこれまで住民票を移転してきた住所地在すべてに記載されているはずだ。

そして、その最後の記載地は、「川口市南町二丁目五番二号」になっているはずだ。[...]

漢字の羅列の上に視線を往復させているうちに、本間は、二の腕に鳥肌が浮いてくるのを感じた。

(火車：133-134。傍線部引用者)

太線部「はずだ」と判断しているのは登場人物「本間」であろう。しかしその一方で、下線部の記述は単なる心内文としては説明的に過ぎる。つまり「語り手」による「説明の草子地」でもあるわけである。しかし「本間」は刑事なので、こうした知識を知っていても不思議はなく、こ

の場面においてこの知識を「思い出して心の中で唱えていた」としても、「心は矛盾がない。読者にとっては誠に都合の良い、思い出され方である」^{注13)}。

更には一見「全知の語り手」が語っていると覺しき作品の中にも、登場人物の知覚や心内とも矛盾しない叙述が現れることがある。

- (12) 阪神特殊鋼の高炉建設は着工後九カ月目を迎えていた。[...]

安全用のヘルメットと作業衣に身を固めた万俵鉄平と工場長の一之瀬は、高圧高炉に最も大切な気密装置である大ベルの取付けにたちあうため、足場を伝って炉頂に近い地上三十六メートルのデッキに上り、作業を注意深く見守っている。高炉建設には、炉に空気を送り込む羽口はぐちの取付けと、炉内の煉瓦積みと、炉頂部の大ベル、小ベル取付けの三つが重要作業だったが、中でも大ベルの取付けは、炉の心臓部にあたる仕事であった。[...]

鉄平は瞬きもせず、厳しい視線を大ベルに向けていた。耐摩耗鋼で作られた大ベルの当板あていたの肉盛溶接がうまく出来ていなければ、それを受けるホッパーとのすり合せが精密に行かず、気密度を減じて一酸化炭素が洩れると同時に、鉄鉱石やコークスの粉が当り面を摩耗し、損なうのだった。しかし、眼の高さまで下りて来た大ベルの当板の肉盛溶接は、鉄平の期待通りに仕上がっていた。

(華麗なる一族：中282-283)

『華麗なる一族』は、全体としては「全知の語り手」による叙述であると、筆者も初読事にはそういう印象を持った。しかし改めて見てみると、実線部のような〈注釈〉的な「草子地」が果たして純然たる「全知の語り手」によるものであるかどうか疑わしくなってきた。この場面は、登場人物「万俵鉄平」が注視している場面であり、地の文で描かれている内容は、〈叙景〉はもちろん説明的な部分を含めてみな「万俵鉄平」の知識・知覚の範囲内と解される。ここでもまた「万俵鉄平」が、読者の理解に資するために“都合のよい”内容を脳裏に去来させてくれたとしても矛盾はないのである。

このように、近現代文学における、「語り手」の心内なのか登場人物の心内なのか判然としない例は、『源氏物語』において「一体化評」（榎本1982）、或いは『和泉式部日記』において「超草子地」（大野1997）などと呼ばれてきたものの一例として数えることができる^{注14)}。本来「語り手」と「登場人物」は〈別人格〉であり、三人称叙述においては〈別人〉でもあるはずだが、ときに両者の区別が判然とせず、〈同一人格〉として「融合」（榎本1982）してしまうことがあるわけである。

3. 文法との関連

これまで「草子地」とそのいささか特殊な類型について触れてきたが、ここで視点を換え、文法研究との関連について触れてみたい。

渡辺（1971）には「誘導の職能」という文法概念がある。従来「陳述副詞」と呼ばれたものの機能に（さしあたり）該当する。

（13）表現の本体は後続する部分にあり、その後続する本体を予告しそれを誘導する（渡辺1971: 312）

（14）きっと失敗するだろう。

決して嘘はつきません。

たとえ苦しい時期があっても、くじけてはいけません。

もし会えなかったら、お手紙で連絡いたします。（同: 303）

「誘導の職能」を持つ「誘導成分」は、渡辺（1974: 142 下段）において次の4つに分類されている。語例を抜粋・補足して掲げておく。

（15）1 態度の誘導成分：（もし、きっと、決して、たとえ^{注15)}）

2 注釈^{注16)}の誘導成分：もちろん、無論、事実、実際、幸、あいにく^{さいわい}

3 批評の誘導成分：確かに、珍しく、明らかに、まさしく、あいなう
ありがたいことに、情ないことに

4 解説の誘導成分：父に似て、いつもの癖で

さてこの分類は「草子地」研究とどのような関連を持つだろうか。中野（1968-1971a）（1971b）の草子地分類には、「[1] 説明の草子地」中に「イ解説」「ハ註記」があり、また「[2] 批評の草子地」がある。これらは渡辺の「4解説」「2註釈」「3批評」に近いようにも見える。また「～だろう」と共起するのは渡辺では「1態度の誘導成分」であり、「～だろう」は中野では「[3] 推量の草子地」に関連する。

しかし、渡辺（1949）が「誘導副詞」を分類するに当たり、草子地論から発想を

得たかどうかは不明である。1949年の段階で既に「解説」「註釋」「批評」の語が用いられており、中野(1968)はもちろん吉川(1951)に比べてもそれは早いからである^{注17)}。また大きな相違点もある。中野をはじめ草子地論では、主として文終止の例を取り上げることが多く、渡辺は副詞や句の形のものを中心に取り上げている^{注18)}。

そこで本稿は、以下のように考える。「誘導成分」も「草子地」も、ある種の共通性を持っており、そのため結果として似たような下位分類がなされたのである、と。その共通性とは、「中核に対して周縁」であるということである。

「草子地」の機能が「中核に対して周縁」であることは既に触れた。そして「誘導成分」もまた(13)に述べられているように、文法機能として「中核に対する周縁」という位置にある。「草子地」と「誘導成分」の下位分類がたまたま似ているのは、こうした共通性に起因するものと考えられるわけである。

4. まとめ

本稿は、物語論と文法論との相互越境を目論んだ研究の一つである。中核的内容に対する周縁的要素という対立として、「草子地」と「誘導成分」には周縁的要素を担うという共通性があると考え。

その周縁的要素を、大きく〈注釈〉〈判断〉の二つに整理し^{注19)}、別に〈メタ言語〉もあるが、本稿では専ら〈注釈〉に重点を置いて取り上げた。周縁的要素である「草子地」は、本来無くても構わないものであるが、あった方がふつう解りやすくなる。しかし、ときに〈同一人格〉に融合

し「一体化評」を行ったり、作外の「作家」のコメントと見分けがつかないこともある。

以上、網羅的な見通し、特に実験的作品を含む文学作品の表現全体の見通しには程遠いが、ひとまず筆を措くこととする。

注

- 1 「草子地」の用語の歴史については井爪(1993)参照。また研究史については榎本(1982)など参照。
- 2 中野(1968: 126下段)では小異がある。
- 3 〈別人〉〈同一人物〉、〈別人格〉〈同一人格〉については福沢(2015)参照。
- 4 「顔出し」の語は樺島(1976)による。
- 5 プリンス(1996)、3章参照。
- 6 なお「語り手」が登場人物「下人」の心内の変化を語ることができるのは、「全知の語り手」の特権であって、後述する「一体化評」とは基本的に異なる。もちろん「羅生門」中にも「一体化評」は少なからず存在する。
- 7 このように、過去形の草子地もありうる。
- 8 ハンブルガー(1986)参照。
- 9 「物語内容」と後述「物語言説」はジュネット(1986)参照。なお詩ならば〈叙情〉だけでも成り立ち、〈叙景〉だけでも成り立つだろう。〈注釈〉だけならば学術書や評論その他のジャンルとなるだろう。
- 10 福沢(2015: 2章9節)において、「省略の草子地」「伝達の草子地」を〈解説の語り〉としたが、物語世界外にテクスト(「物語言説」)がありそれを見な

がら草子地を加えていると見て、〈物語世界外の語り〉に修正する。

- 11 「道化の華」の草子地研究については、木村(1990)宮崎(2009)など参照。
- 12 中村(1994)は、作中作内登場人物「葉蔵」と作中作外の作家「僕」との「決定的な癒着」を、「欠陥視する理由はない」と評価する。
- 13 漫画やドラマなどで、説明的な内容を登場人物の台詞で言わせるという手法はよく見られる。
- 14 その他「自由間接言説」「自由直接言説」(三谷2002)も参照。なお一人称叙述においても「草子地」は存在する。「体験する私」に対する「物語る私」の関係である。シュタンツェル(1989)参照。『枕草子』の草子地については井爪(1993)参照。
- 15 明示的にこれらが「態度の」誘導副詞と記してはいないが、消去法でこう解する。渡辺(1949)(1971)には「態度」という文言なし。
- 16 渡辺(1949)(1971)ではそれぞれ「註釋」「註釈」。
- 17 ただ時枝(1973)[初出1936]に注目すべき指摘がある。これは渡辺も注目した指摘である。

108 | 嬉しくも | 降り積みたるかな(春曙抄上ノ二五一)

嬉しくの主語は話者清少納言。此の叙述面の主語「雪」とは異主語で全く挿入されたものである。

(時枝1973: 239。傍線他時枝)

- 18 もっとも「まことや、」など、草子地論で文中語句が取り上げられることもあるが、例外的である。
- 19 なお〈注釈〉〈判断〉は、前者が時枝の

「詞」に近く、後者が「辞」に近い。もちろん〈注釈〉にも「語り手」の主体的判断は含まれ、〈判断〉にも客体的内容は含まれるのであるが、相対的な傾きの違いがある。

使用テキスト

- 鍵：『谷崎潤一郎全集 第22巻』中央公論新社、2017
火車：宮部みゆき『火車』新潮社(新潮文庫)、1998
華麗なる一族：山崎豊子『華麗なる一族中』新潮社(新潮文庫)2003改版
道化の華：『太宰治全集2 小説1』筑摩書房、1998
藪の中：『芥川龍之介全集 第八巻』岩波書店、1996
羅生門：『芥川龍之介全集 第一巻』岩波書店、1995

参考文献

- 井爪康之(1993)『源氏物語注釈史の研究』新典社
榎本正純(1982)『源氏物語の草子地：諸注と研究』笠間書院
大野裕子(1997)『『和泉式部日記』の「草子地」について』『実践国文学』52
樺島忠夫(1976)「文体・表現特性をとらえる手がかりについて」『表現学論考』
今井文男教授還暦記念論集刊行委員会
木村小夜(1990)「太宰治「道化の華」の構造」『人間文化研究科年報』(奈良女子大学)5
小西甚一(1998)「分析批評のあらまし——批評の文法」『日本文藝の詩学：分析批評の試みとして』みすず書房[初出1967]

シュタンツェル、F.(1989)『物語の構造』
 (前田彰一訳) 岩波書店

ジュネット、ジェラルド (1985)『物語の
 ディスクール：方法論の試み』(花輪
 光／和泉涼一訳) 水声社

高橋亨 (1982)『源氏物語の対位法』東京
 大学出版会

田口敏子 (1951)「源氏物語における作者
 介入の詞 分類・解説」『国文学論叢』3

時枝誠記 (1973)「語の意味の体系的組織
 は可能であるか——此の問題の由来
 とその解決に必要な準備的調査——」
 『言語本質論』岩波書店 [初出 1936]

中野幸一 (1968)「草子地攷 (一)」『学術
 研究——人文科学・社会科学篇』17

中野幸一 (1969)「草子地攷 (二)」『学術
 研究——人文科学・社会科学篇』18

中野幸一 (1970)「草子地攷 (三)」『学術
 研究——国語・国文学編』19

中野幸一 (1971a)「草子地攷 (四)」『学術
 研究——国語・国文学編』20

中野幸一 (1971b)「源氏物語における草
 子地」『源氏物語講座 第一巻 主題と方
 法』(山岸徳平／岡一男監修) 有精堂

中村三春 (1994)『フィクションの機構』
 ひつじ書房

ハンプルガー、ケーテ (1986)『文学の論
 理 第3版』(植和田光晴訳) 松籟社

福沢将樹 (2015)『ナラトロジーの言語
 学：表現主体の多層性』ひつじ書房

プリンス、ジェラルド (1996)『物語論の
 位相：物語の形式と機能』(遠藤健一
 訳) 松柏社

三谷邦明 (2002)『源氏物語の言説』翰林
 書房

宮崎三世 (2009)「太宰治「道化の華」論
 ——小説の登場人物とその書き手が重

なり合うことについて——」『日本文
 学』58-8

吉川理吉 (1951)「源氏物語における作者
 介入の詞 序説」『国文学論叢』3

渡辺実 (1949)「陳述副詞の機能」『国語
 国文』18-1 (『国語表現論』(塙書房、
 2011) に題目・表記等を改めて再録)

渡辺実 (1971)『国語構文論』塙書房

渡辺実 (1974)『国語文法論』笠間書房

渡辺実 (2000)『平安朝文章史』筑摩書房
 (ちくま学芸文庫) [初刊 1981]

本稿は文部科学省科学研究費(基盤C)
 26370544、18K00619の助成を受けた。
 学会の席上その他において、藤田保幸氏
 その他の先生方より貴重な助言や質問を
 頂きました。記して感謝申し上げます。
 (愛知県立大学)